

# デジタル時代における公共社会学の可能性

## ——批判理論と『ビット・バイ・ビット』の創造的対話から——

東京大学 出口剛司

### 【1. 目的】

デジタル革命とその後のインターネット、携帯電話・スマートフォンの普及により、われわれの日常生活は大きな変貌をとげている。インターネットが社会全体を覆うことにより、人と人、人とモノとが24時間接続し、かつそれらと機械学習を可能にした人工知能と科学技術が結びつくことにより、ポスト・ヒューマン社会の到来が真実性を増して語られはじめている。こうした新しい社会環境は、膨大な生活記録をビッグデータとして生み出し、その政治的・商業的利用の是非が問われる一方、社会学の領域ではその経験的調査における有効性に注目が集まっている。本報告では、コーディネーターが提示した『ビット・バイ・ビット』において提示された主要論点に即して、情報ネットワーク社会とそれが生み出すビッグデータの利用可能性と限界を批判理論の観点から明らかにすることをめざす。

### 【2. 方法】

本報告では、1960年代、アメリカの経験的調査の成果がドイツの社会学に大量にもたらされたことを契機に巻き起こった「実証主義論争」を手掛かりに、『ビット・バイ・ビット』で指摘されるビッグデータの潜在的傾向性について議論する。同論争は、ドイツにおける方法論争、価値判断論争に続く第三の社会科学的論争であるが、とくに後者二つの論争に関しては、現在、政治哲学における公共哲学や規範理論の興隆、科学哲学における新しい实在論の登場により、論争それ自体の意義が学史的に問い直されるべき歴史的地点にあるといえる。こうした問題関心から、本報告は近年の公共哲学、科学哲学の成果を踏まえつつ、情報ネットワーク社会と、それが生み出すビッグデータ利用に関する課題を明らかにしていく。

### 【3. 結果】

山本鎮雄の先行研究が指摘するように（『西ドイツ社会学の研究』1986年、恒星社厚生閣）、実証主義論争を戦った批判理論（アドルノ、ハーバーマス）と批判的合理主義（ポパー、アルバート）の主張はその過程において予想以上に近接している。具体的には、ポパーとアドルノの両者による（素朴）方法論的自然主義への批判、ポパーの反証主義に対するアドルノの支持があげられる。しかしこれら二つの論点は、経験的な調査研究の方法に関わる本質的な問題であり、このことにより、論争の本質が方法よりも、むしろ理論の果たす役割にあったことが明らかになる。

### 【4. 結論】

以上の考察を踏まえ、本報告では批判理論が強調する「物象化された事象それ自体としての研究対象」「全体性を先取りする理論の必要＝必然性」という論点を確認し、社会学的理论が「社会批判」であると同時に「認識批判」でなければならないことをビッグデータの特徴に即して主張する。